

井深対談

追い、求め、知る喜び..... (1)

ゲスト：川崎 三郎

川崎 三郎（かわさき・さぶろう）

1923年（大正12年）兵庫生まれ。旧制姫路高等学校を経て東京帝国
大学（現・東京大学）卒業。

1951年（株）PCL入社。

1967年 同社社長。

1970年 ソニーPCL（株）と社名変更、同社社長となる。

1991年 同社取締役会長となり、現在に至る。創立当初から、評議員
として（財）幼児開発協会にご尽力いただいている。

忘れがたい、あんパンのお汁粉……

川崎 これまで、私は井深さんと仕事以外のお話を、こうお近くでしたことないんですが……
(笑い)

井深 そうですね。

でも、この前の林原さんとの対談を読んで、それで、林原さんのお父さんと同じ家に下宿していた、という話を聞いて、びっくりしましたよ、ほんとうに……。

川崎 私もびっくりしました。私は昭和十七年から十九年まで姫路におりました。姫路は、ご承知のように、昔は、軍都と言われるような所でした。師団司令部があり、歩兵も^{しちやうへい}輜重兵も、工兵もみんないましたけれども、歩兵部隊のほうに林原さんがいらっしゃって 我々、「ハヤシハラ」と言っておりましたけども、本当は「ハヤシバラ」とおっしゃるんですか、あの方。

井深 そうみたいですね。いわゆる戸籍上の読み方は、どうなのか分かりませんが、会社は、^(株)「ハヤシバラ」ですね。

川崎 ああ、そうですか。私が下宿をしておりました澤田さんという家に、林原さんも一緒に下宿をしておられました。

それで、歩兵部隊の少尉 確か経理将校さんでしたね。

井深 ケイリ……？

川崎 ええ、計算するほうの経理。ご承知のように、あの頃は甘いものなんていうのは全くなくなっていった頃でしたが、軍隊のほうではまだ配給になるあんパンがありましてね。また林原さんという人はあんパンみたいに丸顔で、よく肥えた立派な体格の方でしたけどね(笑い)

井深 ああ、そうですか。息子さんのほうは、どちらかと言えば、きゃしゃな、細い方ですね。

川崎 そうですか。それで、林原さんがあんパンを二十個ぐらい、軍の配給でもらうと、それを持って帰って来られる。我々に食べさせようと……。

まあ下宿の間 下宿といっても普通の下宿屋さんじゃありませんで、大きいお屋敷なもんですから、ご夫婦が、空いている部屋に私たちが住まわしているというスタイルだったんですよ。私と林原さんと、そのうちのご夫婦と四人で、「これをパンのまま分けて食べてしまったんじゃ、すぐになくなってしまうから、お汁粉にしよう」。

あんパンをちぎって煮ますと、まあ多少塩を入れなきゃ甘味が出てまいりませんが、お汁粉というか、ぜんざいというか、あんパンの皮が煮ると割台おいしいものなんですよ……(笑い)。量を増やしてみんなで食べようってんで、随分それは楽しみでした。何回かそんなことをしていただきました。

井深 それが、林原健さんのお父さんの林原一郎さんね……。

川崎 はい。それで、林原さんのインターフェロンのことを書いた本がございますですね。

井深 独特の林原方式のインターフェロンができるまでのことを書いた『インターフェロン

第五の奇蹟』のことね。

川崎 ええ、あれを拝見しますと、林原一郎さんのことが随分出てくるんですね。また、息子さんのほうが京都大学か京都府立医大かの先生の所へ行って、インターフェロンの話になって、「うちでやりましょう」と引き受けてもらえるところがありますけども、何か、お父さんによく似ておられる。

非常に決断力があるといいますかその辺のところ、今の林原さん あの若い社長さんは、お父さんに非常によく似たところがあるように、私は思ったんですけどね。

その若い林原さんにはお目にかかっておりませんが、林原一郎さんという方には、非常に親切な、人の気持ちを大事にして、よく考えて……それから、みんなで一緒に楽しもうじゃないかというふうな 戦時中のひどい時代ですけどもね 決して、自分だけでなしに、みんなで楽しくしようじゃないかというところがありました、

それで、林原一郎さんはその頃、書に凝っておられましてね。その下宿は岡町という所でありまして、ちょうど、その大家さんが町内会長をしていたもんですから、看板をかけたかったということになった。そこで、「林原さん書いてくれ」。大きな木の板を持ってきて、林原さんが墨で「岡町町内会」と書きまして、門のところへかけたんです。その字が非常に丸みを帯びた、印象的な字でしたが、私には、どうしてもそんなに上手なようには見えなかったんですけどね（笑い）。とにかくこの字がいい、上手だ、町内会ではそういうふうになっておりました。

近くに姫路の地方裁判所がありました。その地方裁判所に石坂修一さんという裁判官がいました。私は後で知ったんですけども、昭和十三年に帝国大学・経済学部教授の河合栄治郎という方の本が、出版法違反で発売禁止、裁判になりました。出版法第二十九条

「安寧秩序を妨害する^{かど}廉を以て」という罪が当時あったんですね。また当時は、今と違って予審というのがありましてね。それで警視庁が予審請求をして、裁判になり、昭和十五年十二月に東京地方裁判所で無罪が言い渡されました。その時の裁判長が石坂修一という方でした。

その裁判で、河合教授を無罪にしたのはけしからん、ということで、石坂さんは左遷されるわけです。東京地方裁判所の部長クラスの裁判長から、神戸地方裁判所の姫路支部長では、もう大変な左遷になるわけです。というわけで、我々があんパンのお汁粉をいただいたりしている時に、隣組にその方もいらっしゃったわけです（笑い）。

ちょうどその家の前あたりに小さい丘がありまして、その丘に上がる月を見て、「私は配所の月を見ていますよ」とおっしゃっていたという話を聞いたりしたんですが、この方が、戦後、最高裁判所の判事になりました。どんな経歴を経られたのか知りませんが、最高裁判所の判事をされるというんですから、大変骨のある立派な方だったんだろうと思います。

私は、その時、そんなことも全然知らないで、後になっていろんなことが分かってきたんですけどね。どうもこれは、井深さんがよくおっしゃる“気”といいますか、それはいい

ろんなふうな表現ができると思いますけども、波動のようなものですね。そんな骨のある人が近くにいて、波動とか粒子とか、そういうものが我々にもう降り注いでいたのに……。それに気づけば、その人の書物を読むとか、教えを聞くとか、といったようなことができたかもしれない。その方のお考えや人格が全部その波動に乗かって伝わってきたかもしれないのに。これは感受性といいますか、そういう波動を受けとめる力のある人なら受けとめられたのに、と思います。

私のように、そういう運命といいますか、考えてみるといろんな体験をしているのに、気づかない人もいます。だから、どうもその種が芽生えて、あるつながりを持っていく、あるいは、それが広がりを持って発展していくという積極的な力が、ある人とない人とがいるんじゃないかというふうに思うんですね（笑い）。

井深 知らない、気づかない、感じない、というのはまことにもったいない（笑い）。

川崎 ですから、教育の問題に関しましても、やっぱり、めぐり合うということが、とても大切なことだと思うんです。いい先生にめぐり合ったとか、感動を与えてくださる先生にちょうど行き合ったとか、どういうふうになってそのめぐり合わせができるんだろうかというのは、ちょっと運命論者みたいですけども、何かあるように思いますね。

井深 誰でもいいけど、その人に少しでも近づきたいと思うような、尊敬できる人とのめぐり合いね。

尊敬・感銘の世界を伝えたい……

川崎 最近のアメリカのものをみておまして、シルバーという人の書いた『何がアメリカをだめにしたか』という本がありますけれども、この中に、やっぱり学校の先生をみんなが尊敬しなくなったと。昔は随分みんな先生を尊敬していた。これは貧乏だとか金持ちだとかに関係なく、とにかく学校の先生というのをみんな尊敬していた。ところが、今はそれがなくなってしまった。これはどうしてだろうかという問いかけをしているんですよ。

それと、ペン習字として格言を書くということを昔はやっていた。その格言というのはまた難しい格言でしてね、「何か完璧な教育を受けようと思うならば、刻苦勉励せよ」とか、そういうことをペン習字で、みんな、わけが分からないけども一所懸命書いていた。そういうことが今や全くなくなってしまった。

ペン習字もなければ、格言を書かせることもなくなったと。これは非常に問題なんじゃないだろうかということ言われているんですよ。

井深 日本には書道、お習字という具合にそれはまだ残っていますよね。漢詩やら漢文からの一節をやっぱり書くでしょう。

川崎 はい。格言とか金言とか、あるいは幼児開発協会で作っておられる、かるたやトランプがありますね。あるいは俳句もありますよね。しかも、日本の場合は韻律がありますから非常に覚えやすいですね。この前、新しく出たご本（注・『胎児から』）で拝見いたしま

したけれども、お母さんのお腹の中にいる間に、五七調で同じ俳句を聞かせていた。生まれてからその俳句を読んでもあまり反応がなかった。新しい、違う俳句には反応があった。どうしてだろうかというあたりは、語調、韻律は同じようでも、どこかが違うということで、0歳のもうその時期、違うものに対する好奇心というのがあって反応を示すんじゃないだろうか、というふうなことをお書きになっていらっしやいましたよね。

井深 一茶の俳句から選んで、マタニティーのお母さんにずっとそれを聞いてもらった実験ね。それはまだ、胎児に記憶力とか感性があるなんてとんでもないと言われていた頃の実験でしたから、生後一週間の調査結果にはびっくりしましたよ。

川崎 そういうのを拝見するにつけても、今、学校の先生が尊敬されない そのやり方も何か前と違って、やらなきゃいけないことを抜かしてきているんじゃないか、効率だけになってしまっているところがあるんじゃないか、と考えさせられるんですよ。これは、我々も大人として、ほんとうに気をつけなきゃいけないんですけども。同時に、こんないい世界というものがありますよ、あるいは、こんないい行いというものがあるんですよ、また、感銘を受けるこんな話があるんですよということを、もっともっと当たり前前に伝えていくことが必要なんじゃないだろうか、とつくづく思います。

それで、私は、井深さんに前からお願い申し上げたいと思っていたことがあるんです。「いや、それはもう手遅れでだめだ」とおっしゃるかもしれませんが（笑い）赤ちゃんとお母さんのお腹の中からの問題、胎教は、これはもう、みんながどんどん進めていかなきゃいけないと思うんですけども、もう一つ、小学校の四、五年生ぐらいで、読んで分かる、ちょっと難しい話も分かるというあたりの人たち、あるいは、もうちょっと上の人たちが読んで、これはおもしろい、ぜひ、そういうことをもっと勉強してみたい、そういう世界に入りたい。将来そういう人になりたい、そういう職業についてみたいと思うような、ご自分の体験とか、その世界とか、何か書いていただけないだろうか.....。

井深さんご自身のことと、井深さんの尊敬できるお友達の方々をお願いをして、小学校の四、五年生から上の人たちのために、こんな世界があるんだよ、というところを本にして伝えられないかと。

また、ご自分が読んで、これは非常に感銘深い、本当に影響を受けた書物だということの紹介でもいいんです。それをぜひともやっていただきたい、と思うんですよ。

井深 やっぱり小学校四、五年生では遅すぎる！ですよ（笑い）

川崎 それだけ大きいのはだめだと、もう（笑い）。でもその辺のところは、私自身の体験もあるんですけど、イタリアの『クオレ』という小説がありますね。これはもう明治時代から日本に伝えられていますし、戦前から岩波文庫にも入っておりました。戦後は、もうなくなっているのかと思っていましたら、今も岩波少年文庫という中に、上下二冊になって入っています。

あの中には、軍隊のことが出てきますし、いじめの問題も出てきますし、それをやっつける正義漢の少年もいますし、先生がほんとうに子供を大事にして教えるというところが

出てまいります。親がまた先生に対して大変な信頼というものを持って接している。これは、今読んでも感動いたします。今こそ、こういうきれいな、純粋な、国を思う心、人を思う心、友人を大事にする心とかいったようなことが、当たり前で伝承されるべきだと。そういうことが何か軽蔑されたり、そんなことはもうどうでもいいんだとか、分かっているよとか、軽んずるような風潮がありますけれども、そうではなく、きれいなもの、美しいもの、大事なものは当たり前で伝えていく、そういうことが大切なんじゃないかと思うんですね。

井深 それを受け入れ、受け止める土台が、お腹の中から生後一年までの、お母さんと子供のかかわりの中でできるんですよ。

林原さん・大原さん・井深さん

川崎 それで、林原さんの話にまたなりますけれども、日経新聞にこの間出ておりましたが今はもうないんですけど、林原さんがお達者だった頃、カバヤ製菓というのがあってカバヤキャラメルを出していらっしやっただけで、とてもよく売れたものだそうですね。

それにおまけという形で、券ですかね、何枚かそろえると本をくださるというのがあったそうですね。

その本が、また大変高い内容のものだったようなんですけども、カバヤ児童文庫とかいう名前でそれをそろえることを子供が一所懸命、やったんだそうです。今の漫画本とはちょっと違う、程度の高いものだそうで、それをもう一度そろえたいと思っている、といったようなことが日経新聞に出ておりましたですね。

それを見ておまして思い出しましたが、林原一郎さんは、倉敷レーヨンの大原総一郎さんと同級生だったというんですよ。

井深 へえ、そうだったの。全然知らなかったですよ。

川崎 それで、大原総一郎さんということになると、また井深さんにつながるんです。

井深 鈴木鎮一先生とも大原総一郎さんとつながるんですけど、それとは別の……なんですか。

川崎 PCL社長だった増谷麟さんが井深さんのところへ行ったら、「何かおもしろい本はないかしら」というふうに言ったら、「これかおもしろいからどうぞ」と言われて、大原総一郎さんの『母と青葉木菟』という本を借りてこられた。その本を読んで、「非常におもしろい、これいい本だから、読むといい」と言われて、私も見せていただいたんです。

これは、鳥の話からお母さんの話から、いろいろの随想をお書きになったものでした。大原さんがお母さんを亡くされて……そういう親子の愛情といったようなことがにじみ出ているような文章がたくさんある本でした。

今日、お会いすることになって、大原さんの本をちょっと捜したけど……見当たらないんですが、確か『夏の最後のバラ』といったような本があったような気がするんです。とにかく、音楽についての造詣が深い方で、メシアン（フランスの作曲家）を軽井沢へ連れ

ていって、小鳥の鳴き声なんかを聞かせて作曲を勧めたりというふうなことをなさっておられますね。

その本には、大阪万博の時に球形の音楽堂をつくりたいと考えられて、それが理想的な演奏場ではないだろうか。そして、そのことについては、井深さんなんかはそれは大変効果があるということを保証してくれている、ということなどが出てきます。

大原総一郎さんは、割合早くお亡くなりになったんですけど、確か、井深さんの一つ下ですよ、お歳が。

井深 そうですか。私のほうが上でしたかね。年齢のことなんか全然気にもしなかった。

川崎 その大原さんと林原さんは中学で同級生だったというんですから、同年代の方で……。

井深 中学の同級生だったんですか。おもしろいもんですね、人生は。じゃあ、林原健さんのお父さんもご存命なら私より一つ下……。

川崎 それで、そのカバヤ文庫なんていう新しい文化に貢献する内容というのは、林原さんは恐らく大原さんの影響を受けたんじゃないだろうか……というのが私の推論です（笑い）。

井深 話がもとに戻っちゃうんだけど、林原一郎さんと一緒だった時川崎さんは何を……。

川崎 私は学生だったです、その時は。

井深 どうして学生さんと軍人さんが一緒に下宿してたの？

川崎 下宿屋さんというよりも、素人の家に間借りをしていたわけですね。

井深 じゃ、ほんとうの偶然だったのね。私、川崎さんも軍人だったのかと思いましたよ。

川崎 いやいや、私はその当時、まだ若くて（笑い）旧制の姫路高等学校の学生だったんです。

井深 それじゃ、ほんとうの偶然だったんですね。事実は小説よりも……だね。

川崎 全くの偶然なんですよ。

井深 林原さんの息子さんの健さんの話だと、料理を作るのが大好きで、しかもできたものは「おいしい、おいしい」と言って食べないと叱られちゃうというお父さんだったと聞いたけど（笑い）無理にでも「おいしい」と言わないと、お父さんの機嫌が悪くなっちゃって、健さんは弟さんよりも食べられなくて閉口したと……。

川崎 とにかく、お汁粉はおいしかったですよ（笑い）。

井深 でも、その頃から、料理が好きで、人に食べさせるのが好きだったんでしょうね。

川崎 林原さんは、食事は軍隊ですまして帰られたです。下宿には、帰ってきて泊まるだけの生活だったですね。軍隊の仕組みがどうなっていたのか分かりませんが……。私も学校の食堂で三度三度食事をする。やっぱり寝るだけということで間借りをしていたわけです。

井深 でも、昭和十七年から十九年といたら、確かにあんパンはもう貴重品ですね。

川崎 そうです！（笑い）あんパンそのものが手に入るのは大変なことなんですから。

それで、もう一人変わった方がいましてね。それは、大阪帝大医学部の呼吸器科の教授で、軍医少佐でした。河盛好蔵さんというフランス文学者の方がいますね。その方の甥か何かにあたる、やっぱり河盛さんという昔は、肺病といえは大きな国民病で、それでたくさん亡くなったんですから、その専門家ということになれば神様みたいな人なんで

すが、その方もそこに、下宿をしておられました。

井深 ずいぶん、いろんな人が下宿をしていたんですね(笑い)。で、町内も大変だし(笑い)。
川崎 それで、私はちょうどその時に兵隊検査がありましてね。徴兵検査ですけど、「胸がどうもおかしいぞ、おまえは」というふうに言われてしまいました。それで「喀痰検査をするから、走って外へ行って痰を取ってこい」と。それで、走ったんですけど、そんなにやたらに取れるものじゃない。「それじゃ、もういい」と言われて、帰ってきて、徴兵検査でそういうふうに言われて合格にはなったんですけども、胸が悪いと言われたと言ったら、「よし、それじゃ調べてやるよ」と、聴診器と手でトントン、打診というんですか、それだけなんです。それだけで五分ぐらいひっくり返しちゃ、ああしてこうして、どうだこうだと聞いただけで「全然異状ない、問題ない」と言ってくれました。そういう名医だったんですけどね。

井深 そういう時はどっちがよかったんですか。病気だと言われたほうがよかったんですか(笑い)。

川崎 どっちがよかったんでしょうかね。しかし、もう徴兵検査は受かっていますから。あとは戦争へ行くばかりですから。

そんなことがありましたけど、林原さんと河盛さんと私と、とっても不思議な出会いです。

出会いの言葉……

川崎 その当時は少しも気づかなかったことが、今、考えるともったいないようなこと……そういうことを考えてみますと、先ほども申しましたけど、何か運命的に結ばれるようなものがあったても、それをきっかけとして積極的に活用していく人、開いていく人と、私のように、じっと黙って、そのまま種として、ずっと持っている人間との違いがあるんじゃないかな、というふうに思いますね。

それから、大原総一郎さんの本なんか見ますと、よく誰かが亡くなる前に、何か虫の知らせみたいなことがあったというのが出てきます。で、翌朝起きたら、亡くなったという知らせが来たとか、どうも非常にこの方は感度というか、“気”が強い方だったのではと思うんです。そういう目に見えないものを、確かに感じられる方と、割合鈍感な人というんですけども、感ずる人というのは、やっぱり何か違った、すぐれたものを持っているらっしゃるように思いますよね。

井深さんは、それこそ“人にそれを言うと笑われた”とおっしゃっておられますが、もう何年も前から“気”のことを言われましたね。こうして昔のことを振り返って、人との出会いを思い出したりしますと、そのことをつくづく考えさせられますね。

井深さんと、こんなお話をしたことは初めてですけども、そもそもの出会いのところで忘れられないことがあります。

PCL初代社長の増谷さんが亡くなってから、二代目を継いだ私は、いろいろと井深さんから教えを受けました。

昭和四十年代初めのその当時、一番の問題は、何といたってもお金の調達と、もう一つが労働問題というか、組織づくりの問題だったと思うんですね。

その時に、一緒に働いている人というのは、金だけの問題で働いているんじゃないんだと。自分を完成する、今の自分をよりよくするというために、みんなが力を合わせて仕事をしているんだ、というところが一番大事なように思うので、ひとつ何か、そういう会をつくって、みんなで勉強するなり、向上する機会をつくるなり、ということをやりたい、といったようなことを申し上げたことがあるんです。

「しかし、そういうことを調べてみても誰もやっていないので、躊躇しているんです」と言いましたら、「誰もやっていないということは、あなたがやらなきゃだめだということですよ。他に例がないというんなら、あなたがやらなきゃ」とおっしゃった。これがもう、最初のところで忘れられないんですね。

その時に、もう幼児開発協会というのをおつくりになるなんていう話があって、それから幼児開発協会とのご縁ができたわけです。

井深 おもしろいな。

つづく

井深対談

追い、求め、知る喜び..... (2)

ゲスト：川崎 三郎

川崎 三郎（かわさき・さぶろう）

1923年（大正12年）兵庫生まれ。旧制姫路高等学校を経て東京帝国
大学（現・東京大学）卒業。

1951年（株）PCL入社。

1967年 同社社長。

1970年 ソニーPCL（株）と社名変更、同社社長となる。

1991年 同社取締役会長となり、現在に至る。創立当初から、評議員
として（財）幼児開発協会にご尽力いただいている。

ホットドッグの思い出

川崎 幼児開発協会ができた頃の理事さんには、ほんとうに個性的というか、ソウソウたる方がいらっしやいましたね。

幼児開発協会がご縁で、虎狩りや冒険の殿様で有名だった徳川義親さんが一緒に食事を誘ってくださって、東京大学の茅 誠司さんとか、皆さんがお出ましになり、いろいろ有益なお話を、私は末席で聞かせていただいた覚えがあります。

井深 川崎さんには創立以来、評議員をお願いしているんですよ。

川崎 はい、そうです。

徳川義親さんは、どこか出先の途中から急に電話をかけてこられて、おもしろいことをおっしゃるんで、楽しい方でしたね。何かご親戚の方がホットドッグの店をやっているんだけど、ある人がドイツへ行ったら、ホットドッグの店の看板に、パンの間に犬を

耳が垂れている犬がいますね 挟んであるのが出ていた。それがおもしろくて持って帰ったのを見て、「これはいい」と。是非それを親戚のホットドッグの店に掛けさせたいので、「複製してほしい」と、こういうお話でした。

ところが、その複製はできないということでした。これ著作権で何か言われたら今後大変なことになるんで、それなら、複製じゃなく新たに作りましょう、というんで、耳の垂れた犬を見つけて、その犬を訓練して、何遍も何遍もパンに挟んで……（笑い）。今だったら、合成でそんなことは簡単にできるんですけど二十五年も前のことですから。

井深 それでパンと犬の写真を撮ったんですか。

川崎 それを一生懸命作りましたけど（笑い）。

井深 犬もかわいそうに（笑い）。

川崎 それで、苦心の末に、まあまあというのができましてね。目白のお宅へ持って伺ったら、随分喜んでくださって……。

井深 それ幼児開発協会が縁でのことね。

川崎 はい、そうなんです。

井深 まあ随分おかしなことをやって……。でも、ホットドッグがまだ、今みたいに盛んでなかった頃だものね。

川崎 そうやって、たびたび皆さんがお集まりになる。一緒に食事をする。そこで顔見知りになる。そうすると、そういう、今考えるとおかしいような、いろんなことをおっしゃるわけですよ。

井深 そうやって、ご飯を食べちゃ、おもしろい話ばかりしてたんですか。幼児開発協会の相談と言って（笑い）。

川崎 ええ。だから、幼児開発協会の難しいお話というよりも、やっぱり皆さんそういうふうにお集まりになって話しておられますと、それは、虎狩りに行こうという殿様ですから、発想がおもしろいですよ。いろんなことをおっしゃるので。

井深 それで、どうしたんですか。その看板は……。

川崎 大きな写真で看板を作りましたから、それは、お使いになったと思いますよ。大変喜んでおられましたし。

井深 まさに犬肉を挟んであるみたいじゃないですかね（笑い）

川崎 我々には、どんなにかわいい犬でも、コッペパンみたいな間へ挟んで、それをホットドッグの看板にという、どうもそのユーモアが分からないんですね（笑い）

日本人だとすぐ、犬の肉を挟んだと解釈しちゃう。でも、一目見て、確かにホットドッグですよ。

井深 ところで、私が大学を出て、一番最初に就職したのがPCLという会社なんだけど、ずっと続いて、川崎さんは今その会長さん。

川崎 同じPCL。ただし、井深さんがおられた頃とちょっと変わっているところもありますが……。

井深さんの頃には、写真化学研究所（PCL＝フォト・ケミカル・ラボラトリー）といいましたね。これは昭和六年ぐらいに、植村泰二さんとか、先ほどの増谷 麟さんとかが設立されたんですよ。

井深 増谷さんという人の人物像が浮かばないと、話がつまらないけども、ほんとうに大きい人でしたよね。大人^{たいじん}という意味で。

川崎 PCLの設立者の一人ですが、技術者なんですね、大体が。当時は、現像の神様みたいに言われた人です。

昔は金沢医専と言った、今の金沢大学になりますけれども、その医専の薬学部を出られて、松竹で技師をしておられて、録音と現像にかかわっておられた。当時でいう活動屋さんの世界ですね。カメラのほうも、技術者は技術者ですけども、ケミカルというのと、ちょっと違っている。その意味では、録音のほうは、全く技術を優先してすべてをやっているかなければいけないということで、一目も二目も皆さん置かれていたわけです。

増谷さんは現像のほうの専門でおられましたけど、現像するということは、撮影のことまで把握していなければいけないんですね。照明がどうだ、レンズがどうだ、感光材料がどうだ、ということが分かっていないと、本当の現像はできないわけですから。

それで、戦前は写真化学研究所ということで、映画会社の日活の下請けの仕事をし、録音もしていたわけです。ですから映画フィルムの現像と録音が主な業務だったんですね。

そうしましたら、日活が自分のところで録音を始めると言い出した。そうすると、どうしてもPCLの商売がなくなってしまうということで、それなら自分のところで映画も作ろうかということになった。それがPCL映画になるわけですけども、昭和八年ぐらいのこと。そしてほんとうに映画を作ろうということまで行ったわけですね。

映画を作るのなら、それまでのとはひと味違う 当時の言葉で言えばハイカラでモダンな、若い人たちに受ける、斬新な映画を作っていこうと。従来の映画界に見られたドロドロとしたものはやめたということでしたが、これが大ヒットしたんですね。

そこで録音ということについて、自分たちでどんどんよくしていかなきゃならないという時期、ちょうどその時に井深さんがPCLへお入りになったんですね。音を光に変えて、それをまた、音に変えるという、光の変調の研究をしておられた井深さんにはぴったりの仕事で……。

井深 ちょうど映画が始まった頃。トーキー映画がね。

川崎 何しろそれまでは無声映画で、活弁さんが説明していたのが、トーキー映画になって音が一緒に入るようになりましてから、録音の意味がすごいわけですね。今考えると大変な革命なんですね。

PCL、今、昔

井深 つい先だって亡くなった藤山一郎さんの“青い背広で”という歌が大ヒットして映画を作った。そうすると、録音室というのは、いつも二階にあって調整しているので、お二階さんと呼ばれた。だから、私もいつも二階にいたから、藤山さんは、最近まで時々、私のことを“お二階さん”と言われた。

川崎 録音部の権威のある技師の人たちは、PCLの場合は、二階にいてやっておられたらしいですね。だから、録音の偉い人はみんな、お二階さんなんです。

それがPCL映画製作所という時代じゃないかと思うんですが。

井深 そうです。それが後で東宝になった。当時はPCL映画製作所。

川崎 はい。それが、今はなくなってしまいましたけど、大沢商会というところのJ・Oというスタジオが京都にありまして、そのJ・Oと東京宝塚劇場とPCL映画製作所とが一緒になって、東宝という会社ができるんですね。その頃はもう、井深さんはいらっしやいませんよね。

井深 あまりおもしろくないのでやめちゃった(笑い)。私は録音技術に興味があってPCLに入ったのだから、映画の撮影所じゃ、ちょっと……。

川崎 とにかくまあ半分は遊びみたいな感じで、芸術家がうろろろするようなところは、あまり性に合わないと思われたんですかね。

井深 技術屋としては、映画を作ることのほうが主になると、あまりもう興味がなくなった。それで、植村所長に頼んで植村さんが社長をしている日本光音工業株式会社というところに移った。

川崎 でも、井深さんは増谷さんのところへ居候していらっしやったということですよ。増谷さんのおうちに、いうところの下宿をしておられた。

井深 そう。早稲田を卒業すると同時に。早稲田の寮を出たから……(笑い)。

川崎 とにかく、そういうわけでPCLから東宝になりました。それで、太平洋戦争が終わったら、皆さん、戦争映画に協力したということでパージ(公職追放)になってしまったんです。パージになったんでは食べていけない人が出る。だからPCLとしては現像をもう

一回やりたいと。初めは現像と録音をもう一遍やりたいと言ったんですよ。

それで、GHQへ尋ねたら、「映画製作は一切だめ。録音は映画を作るということに非常にかかわりがあるのでだめだ。現像は人が写したものを処理するだけだからよろしい」と。そうすると、映画関係の中で技術者として取り上げられるのは、現像だけということになりますね。それで現像をやろうと。

それと、昔はすべて 現在でもそうですけど、劇映画を作るのは三十五ミリという、幅三十五ミリのフィルムを使っていたわけですね。ところが増谷さんは、戦後のこれからは、やっぱり学校なんかで使われる文化映画、教育映画のようなものが盛んになるんだから、三十五ミリじゃなく十六ミリでいこうというので、十六ミリ専門の工場を作りたい。

そして現像も、十六ミリで新しくやろうと。そのために増谷さんが考えられたのは、古い技術者 三十五ミリをやっていた人たちは一切抜き。若い人間ばかりを集めて、それで、この人たちに自分が直接教えてやっていこうということで、昭和二十四年頃からとにかく建物を作り、それで二十六年に新たなPCLとして、また正式にスタートしたわけです。そのために、二十五年頃から現像を中心として、いろんな訓練を若い者にいたしました。

その時に、私は加わったわけです。ですから、私は二代目になります。で、小林一三さんという方が東宝の社長さんをしておられましたから、小林さんのところへ伺って、PCLという看板をもう一回使いたいと言いましたら、「それはいいじゃないか、ぜひやれ」とおっしゃってくださって。同時に「スタートのためには、いろいろ大変だろう。東宝の劇映画の、十六ミリ版を作るから持っていけ」と東宝映画の十六ミリ版をつくるのを我々がやらせてもらうことでスタートをいたしました。

井深 そこで、映画とは全く別になって、元の仕事に戻った。

川崎 戻りました。それで、その時に、いろいろお願いをして、井深さんにも株主になっていたんだいんですよ。

そうやって、株式全社PCLというのを、また古い看板を出してきてつけて、始めたわけですけど、もちろん井深さんにも、何かにつけていろいろ相談にのっていただいたりしてスタートしたわけでありまして。

だから、PCLといっても、井深さんがお入りになったPCLというのは、昔の写真化学研究所、PCL映画製作所というほう。で、その後がまたPCLになって、今のPCLというのは、昭和四十四年からソニーPCLになるわけです。ソニーに出資をしていただきました。ソニーの中に入るわけです。

井深 世の中は映像の時代になってくるから、写真だけを扱うビジネスの他に映像全般に関する部門がほしいと思って.....ソニーの中に入ってもらった。

川崎 そこで、何か映像関係の世界中のセンターにしようじゃないかというふうな、お話が出てまいりました。それで、今までの写真だ、映画だということだけでなしに、それはもう次のステップに進めということだったんですよ。

仕事を進める上で、私がずっと言ってまいりましたのは、起承転結を考えるということでした。この言葉は、中学校で今でも教えていますよね。もともとは漢詩の作り方ということなんですけども、文章の書き方、作り方ということで、中学校なんかでは教えているみたいですね。その起承転結というのは論理的に言いまして、どうも正反合（テーゼ・アンチテーゼ・ジンテーゼ）という弁証法、三段論法に近いですね。

しかも、正反合なんていう論法よりもはるかにすぐれた発展の論理じゃないかと。物事の実態というものが今ある。それから、それを受けて何かをまとめていく。そして、そこで一遍、線を引いて、全く新しくポンと点を打つ。その点は今までの、そこまできたものの、良いものを生かしながら、しかも最後の結というところを想定しながら、その点のところを新たに読み出すわけですね。

ですから、絶えず我々はある点という境地にいて、次にどこへ点を新しく打つかということを考えていかなきゃいけないんです。その場合、新しくと言うけれども、それまでのすべてをなげうって、全部を新しくやるということではないだろうと。

そうすると、会社はそのまま続いて、内容として新しい仕事に取り組む場合には、従来の考え方にいったん線を引いて、やめて、新しいものに取り組むんだとよく言いますね。しかし、そこにはやっぱり歴史があり、長年培ってきたものが生きている。その良いところを新しく生かすためには、どうも正反合という形よりも起承転結というほうが分かりやすいんじゃないか、と私はずっと思っています。これは万物の流転、発展の論理として、常に考えていかなきゃいけないと。

必ず読む『幼児開発』

川崎 関西に、住友生命の名誉会長さんで新井正明さんという方がおられます。初めて私がお目にかかりました頃は、社長さんでしたが.....。

住友生命で生命保険の外交員の教育をビデオでしたいということになりましたね。それで、ビデオに関して各社のものを調べたら、ソニーのものが一番いいということになったんだそうです。ところが、その新井さんはナショナルの監査役さんもおられた方なんですよ。ナショナルも同じようなものを作っていますから、社長がナショナルの監査役なのにソニー製品を売り込むのはどういうものか、どうかならないかと私のところへソニー大阪から言ってきたんです。それで、いろいろ当たってみて、結局、伊丹のほうにある関西国際空港ビル株式全社というところの社長をしていた中学時代からの友人に頼んで、新井社長にお目にかかれることになりました。

私はとりたててお土産を持っていけるわけでもありませんから、とりあえず『幼児開発』誌と、それから誰でも写せるという、例のオートカメラを持って出かけました。それで社長さんを写して帰り、それをきちんと伸ばしてきれいに仕上げ上げて差し上げよう。

「機械は各社いろいろお作りになっていて、甲乙ないかもしれない。しかし、ずっと、そ

れを外交員の教育のためにお使いになるというのであれば、ソフトが大切でしょう。そのソフトを円滑に供給していくという仕事をどこかがやらなければ、せっかくの機能もうまく働かないということになりますから。それは我々が責任を持ってやらせていただく、という気持ちでありますので、ぜひともソニーのものに決めていただきたい」と申し上げました。そしたら、「いかにもソフトウェアが大切なだから、そのためにもソニーのものに決めたらどうだ」と、二億五千万円ほどのものが、それで決まっちゃったわけですね。

私は、それをずっと誰にも言わなかったんですよ。ナショナルの監査役をしておられるのに、ソニーのものに決められたということになってくると、ご迷惑がかかると悪いですから……。そうしましたら、後で「どうして住友生命にソニーのものが採用してもらえたのだろうか。あの方はナショナルの監査役さんだよ」というふうに、どうしてそうなったのか分からないということになりましたが、実際のところはそういうことがあったんです。

私はそれ以来、毎月お手紙を書いて、『幼児開発』を一冊ずつお送りしているんです、今でも。

井深 へえーっ。

川崎 もう二十年になりますね。それは、私ができる唯一のお礼の気持ちなんです。そんなに難しいことを、五分で決めていただいたんですからね。『幼児開発』をお送りしているということと、それから、できれば何とか住友生命の生命保険に入るように勧めた（笑い）。何人か入ったんですよ。

それで重要なことは、『幼児開発』（笑い）、「幼児開発って何ですか」と聞かれましたもので、お話をしましたら、大変感心してくださいましたね。

昭和二十年、終戦の詔勅を書いた人として、また陽明学の大家としても有名な安岡正篤^{まさひろ}という方がおられましたね。新井さんは、この先生を信奉しておられました。この安岡先生という方が、やっぱり幼児の教育あるいは赤ちゃんの教育、これについて非常にいろんなことを言っておられるわけですね。その安岡先生のことを、新井さんがまとめ役になって、関西の松下電器を中心にして、住友系だの、いろんな方が集まって勉強しておられる。そこに井深さんは講演にいらっしゃったんじゃないんですか？「井深さんにお話を伺いましたよ」と伺ったことがありました。

井深 私は三遍ぐらい行きましたよ。でも、そういうことだったの。

川崎 そういうことです（笑い）。私は、今もお手紙を毎月、書いています。「このたび『幼児開発』が出ましたので、どうぞ高覧いただいて……」、そしてまたきちょうめんな方で、一年に二回、必ず盆と暮れにはかきが来るんですよ。「いつもご丁寧に『幼児開発』を送っていただいてありがとうございます。これはもう私には関係がないので、孫に教育するように、よく読んで、と子供に言い聞かせております」と。

まあそういうことですけど、安岡先生のお考えを継承して、みんなに広めていこうというので、関西が特に熱心のようなのですが、財界の方が一緒に努力しておられますね。

それは何かというと、大元は儒教の教えなんですね。何と言っても儒教というのは、もう千七百年ぐらいになりますか。

王仁博士というのが『論語』十巻とともに、日本に儒教を伝えて、それで、後だいたい八〇〇年代に、空海なんかが綜芸種智院しゅげいしゅちいんという、まあ学校をつくりました。特権階級だけでなしに庶民まで含めて勉強させようというので藤原氏の支援で、そういうものをつくった。その時、密教と顕教と儒教の三つを教えています。

仏教と儒教というのは、もう一体の形で日本は受け入れておるわけですね。それだけ長い間ずっとつながって、みんなの支えになってきた教えというものが、どこかで切れてしまうというのはおかしいではないか。やっぱり当たり前に、正しいこと、いいこと、それから美しいこと、尊敬すべきこと、は伝えられていくということが非常に必要だと。

『あと半分の教育』のすすめ

川崎 里見弴さんの『文章の話』という本が、昨年、岩波文庫から出ました。昭和十二、三年頃に出た子供のための文章の話の復刻版なんですね。その中に“胎教”の話が出てくるんですよ。

“考えてみると、胎教も当たり前のこととして世の中にあるでしょう。その話になりますと、理事長が、またおっしゃりたいことがたくさん出てくると思うんですけども。ずっと昔から、とにかく積もって積もって、いっぱい積もったもので成り立っているのでしょう、我々の今というものは。それはまた、お母さんの中にも積もっているだろう。その前にも、またその前にも……。それが生まれたところで、また新たにその環境でどんどんいろんなことを経験して、積み重ねて、人間というのはできていくのだ”と、非常にうまく遺伝と環境についても説明をしている。そして、胎教の重要性が書いてあります。

井深 里見弴さんをご長命で、最近まで生きておられたよね。

川崎 そういう人が、“それが当たり前”としておっしゃることにつながっていたものが、何かどこかで切れちゃったんですね。先ほどから私が繰り返し言うております“当たり前”の意味は、そうあるべきものは、あるべきものとしてつなげていくことの大切さ……です。そこに非常に問題があるんじゃないかというふうに私は思うんですけども。

今、もう一度、この大事なことを子供に伝えていただけませんか、というのには、お母さんに言うのはもちろん大切なんでしょうけれど、そのずっと前の小学校の四、五年生頃の人たちに、「ああ、そんな世界があるのか。そういう知識が必要なのか」というふうに思えるように、当たり前のこととして、ごく自然にお話をしていただけないだろうか。これはぜひ幼児開発協会の新しい仕事の一つにしていただけませんか。

井深 胎教のフォローの一つとして……。その人たちが親になった時のためにね。

川崎 最近の小さい子は、小学校の四、五年生といっても、もう親になったらどうだとか、結婚してどうだとかいったようなことまで、核心は分からないにしても、ある程度、分かる

ようになってきていますからね。やっぱり、その人たちがきれいなことの重要性とか、赤ちゃんはおっぱいで育てなきゃいけないんですよ、これが一つの流れですよ、といったような……。何としても半年間はおっぱいで育ててもらおうとか、あるいは、あまり早い離乳はいけないとかいったようなことぐらいまでは、もうそういう小学校の小さい人たちが知っていてもいいんじゃないかというふうな気もするんですよね。

井深 とっても『幼児開発』をよく読んでくださって……どうして今までそれを黙っていたの（笑い）

川崎 でも、人に差し上げるからには、私が読んでないということになったら、大変これは失礼ですから、必ず読んでいます。隅々まで読んでいるわけじゃありませんけど、読んで、それでお送りしておりますよ。

もう一つ、つけ加えさせていただくなら（笑い）井深さんの『あと半分の教育』も、大人のあらゆる層の人に一人でも多く読んでもらいたいと願っています。あれはやがて古典となる本だと感銘しています。繰り返し読んで、考えてほしい本ですね。あの本の中に出てくる、ウェーランドの『脩身論』、フランスのボンヌの訳本『泰西勸善訓蒙』の内容が知りたくて、私は古本市で見つけましたもの。

井深 私よりよっぽど、よく読んでいる（笑い）

川崎 我々いろんなことをいっぱい、読んだり、断片的に知識としてあったりして、それをもう一度確かめたいと思っても、確かめる時間がない。それで、結局図書館へ行って調べるしかないわけですよ。国会図書館へ行きますと、資料も随分あるんですけど、私は土曜日にはしか行けません。そうしたら今度、第三土曜だけが開いて、あとの土日は休みということになりました。

井深 それじゃ大変。勉強する時間がなくなる。

川崎 月に一回しか行けなくなるんですよ。

つづく

井深対談

追い、求め、知る喜び..... (3)

ゲスト：川崎 三郎

川崎 三郎（かわさき・さぶろう）

1923年（大正12年）兵庫生まれ。旧制姫路高等学校を経て東京帝国
大学（現・東京大学）卒業。

1951年（株）PCL入社。

1967年 同社社長。

1970年 ソニーPCL（株）と社名変更、同社社長となる。

1991年 同社取締役会長となり、現在に至る。創立当初から、評議員
として（財）幼児開発協会にご尽力いただいている。

聞こえる音・聞こえない音

川崎 話は飛びますけど、東郷平八郎元帥が昭和八年に亡くなって国葬がありましたね。その時に、アメリカから甲意放送というのを送ってきたんです。そこに問題が一つあった。その時、国葬の録音は確か、井深さんがなされたんですよ。モーニングを着て、国葬本部で式の模様を録音なされたという……。

井深 そうそう。そうでしたよ。

川崎 甲意放送としてNBCかどこかが電波を送ってきたら、その一番最初がおめでたい『カッポレ』だったと。これが大問題、「カッポレを送ってくるとは何事だ」と。

あとで、どうしてだろうかということになったんですけど、どうも『カッポレ』は、彼らが聞くと悲しい感じがするらしい。それで、頭のところへ『カッポレ』を持ってきたと。

芸術の受けとめ方、その感覚というのは、国によって違うのか、ということなんですけど、そういう大問題になった事件があったことは、井深さん、ご存じでしたか。

井深 いや。全然知らない。

川崎 ご存じないですか。私はその新聞を国会図書館で探して、見ましたら、もう大きな字で大変な扱い。NHKが謝りに行って、海軍省がオーケーしてくれて、みんながほっとしたということなんですけどね。

井深 向こうは、日本の音楽なら何か探したんでしょうよね。

川崎 ちょうどその前の年に、いろんな日本の曲を寄せ集めて、山田耕筰さんが作曲した曲を向こうへ送ったんだそうですよ。日本の紹介のために。その中に『カッポレ』が入っていたと。新聞もそれ以上詳しいことは、もう言ってないんですよ。

それで私は、三味線で『カッポレ』を弾いてくれと、芸者さんに頼んでみました。そして、テンポが速いのと遅いのと両方……と言ったら、その人が、テンポを遅くしたら悲しくなりますよと言いました。

井深 じゃ、やっぱりそうなのかしらね。

川崎 『カッポレ』を勢いよくやりますと、まことに賑やか(笑い)。ところが、ゆっくりだと悲しい曲になっちゃう。恐らく国葬の時は、ゆっくりにして送ってきたんじゃないかなと。これは、そのもとの曲がゆっくり演奏されたものだったんじゃないか、これは私の推測です。

そんなことを国会図書館へ行って調べるのがおもしろくてやっているんですけど、一カ月に一回になっちゃって、本当に困ります。

井深 なるほど。

川崎 さっきのメシアンというフランスの作曲家に、大原総一郎さんが軽井沢の小鳥の声を聞かせて作曲してもらった。ところが、このメシアンさんという方は、例えば天国の色を十色指定して、楽譜にその色をつけて、この音が何色を表す、だからそのように演奏して、というふうなことをやる人らしいんですけども、自然の音は難しいですね。

例えば松風の音、松^{しょうらい}籟。これを録音するのはどういうふうにしますかという、誰もできないですよ。

それから、鳴門の渦潮。あの潮の流れの渦巻きが大きくなって動き出すと、すごい音をするんだそうですね。そういう音を録音するには……。

そうしたら録音屋さんは「それはヘリコプターからマイクをぶら下げてやればいいですよ」と。ヘリコプターの音が入っちゃうじゃないか。

井深 そりゃ、そうだ(笑い)。

川崎 そうしたら、俳優座の録音をしているチーフの方でしたが、これはやっぱりすごい。「それは大変だけど、強力なモーターをつけたボートを、渦の起こりそうな所で完全に止めて、それで録音機を置いて待つ。ゴーという音がししたら、入るか入らないかは別として、もうとにかく音が入ったという三秒か四秒で、超特急で逃げれば……。」と。

井深 逃げ遅れたら、渦に巻き込まれる、大変、命がけ(笑い)。

川崎 そういう自然の音というものをどういうふう^とに録るか、という問題があります。音楽のほうの表現はできるわけですね、作るわけですから。表現するというのと、実際の音を録るということは違うと思うんです。

CDなんかはデジタル録音といって、二万サイクルで切ってしまう。それを今は、二〇Kヘルツと言うんですが、二〇Kヘルツ以上の音は必要ない。大体、人間の耳には聞こえないんだから、そんなもの切ってもいいんだとされています。

ところが、この間、九〇Kヘルツの音まで入れたものを聞かせるという催しがありました。人間には二万しか聞こえないのに、九万の音を入れて再生してみようという、オーディオ協会の催しの一つなんですよ。

井深さんはオーディオ協会の名誉会長ですよ。まあ今は、デジタルの二〇Kヘルツでみんな一生懸命になっているんですけども、それから先を考えている人間がちゃんといます。体に響く音、皮膚に感ずる音というものがあるだろうということですね。それがあって、音が本当に分かるんだと。その方式で、モーツァルトの曲なんかを入れて聞くと、全く何ともいえない、きれいな音になるというわけですよ。その音はいくら口で説明しても無理だ……ということですから、自分で聞いてみなくてはと思っています。

井深 それは音としては聞こえないものなのね。

川崎 聞こえないんだけど、しみてくるような……。

井深 耳以外の体全体の感覚ね。

川崎 だから、音を感じるといのは、やっぱりそのぐらいまで入れなきゃ。それで、土の中にマイクを埋めて、外の音と土の中にあるマイクと合わせて録音をするというぐらい、自然の音を入れようとする、やらなきゃいけないんだそうです。おもしろいですよ、これは。

井深 でも、本を読んだり、何かそういうのを調べるのが、随分好きなんです。

川崎 調べるのは好きですね。時々その話をしますと、聞いていた人が「あっ、それならば、

ここだ」と教えてくれたりするものですから、一人でやっていちゃだめだな、というふう
に最近は思っています。

“ ティペラリー ” 追跡

井深 何か特に凝って調べているものはあるんですか。秘密ですか。

川崎 秘密ではないですけど。今凝っていますのは、『ティペラリー』という曲についてなんで
す。

井深 ティペラリー？

川崎 これは第一次世界大戦の時ですから、大正四年から七年ぐらいのことですかね。イギリ
スの兵隊が歌ってはやらしたということで、行進曲みたいな歌ですよ。

その曲が大正時代に日本でも非常にはやりました。はやしたのは浅草オペラらしいん
ですが。で、浅草オペラは正式なオペラ以外に、自分たちで、その時、はやっている何か
調子のいい曲を勝手にどこかに入れて歌ったんだそうですよ。みんながわーっと喜ぶよう
な曲を……。

その頃、浅草オペラで『女軍出征』 女の軍隊の出征というオペラを作って、その中
で『ティペラリー』と『ダブリンベイ』という二つの曲を絶えず歌ったそうなんです。地
方巡業もやり、調子がいい曲なもんですから大流行。それも、もうペラペラの英語で歌っ
ているんですね。

ところが、その『ティペラリー』というのは、どんな内容かというとアイルランドにテ
ィペラリーという町がある。その町に残してきた女の子が忘れられない。それで、私は彼
女に手紙を書いた。それに対して、その女の子から返事が来る。それは「早く帰ってくれ
ないと、私、結婚してしまいますよ」という手紙だった……なんて他愛のない歌です。そ
んな歌をイギリス軍が歌うとはもってのほかだというようなことを言われながら、もうフ
ランスからドイツから、やたらはやって、日本でもはやった。中国でもはやったというん
ですよ。それで、その中国語の『ティペラリー』の歌を誰か知っていないかと、誰に聞いて
も分からない。

井深 どうしてそれをそんなに一生懸命調べているんですか。

川崎 フランス映画で『大いなる幻影』というのがありましたよね。

井深 うん、名作がありましたね。

川崎 これは昭和十年頃できて、日本では反戦映画であると禁止されて上映できなかったんで
す。それで戦後昭和二十四年（一九四九年）に封切りになりました。フランス軍が捕虜に
なって、捕虜収容所で脱走計画を練って、最後は逃げていくという映画なんです。収容所
で捕虜の慰安日というのがあって、フランス軍の兵隊たちが女装してレビューダンスをし
たり、歌を歌ったりする。その中に『ティペラリー』が出てきた。最初、それを聞いた時
は、何の曲やら分からないけれども、とても印象が強く、調子のいい歌だなと私は思って

いたんです。

そして昭和三十二、三年頃にコロンビアの小さい盤で、赤軍合唱団のレコードが出たんですけども、その中にまた……。

井深 赤軍でロシアですか。

川崎 ええ、ロシアの軍隊の合唱団。ソビエトの民謡なんかを歌っているんですけどね、『ティペラリー』が入ってたんです。その解説に、第一次大戦の時にヨーロッパで大いに流行したのを聞き覚えて、ソビエトに持って帰った人たちが歌っているのを採譜して、みんなが演奏するようになったんだと。

そして一九四七年に、コザック合唱団というのがロンドン公演で歌って、大変な評判をとったと。

実は、そこで初めて私は、その曲が『ティペラリー』という曲であるということが、はっきり分かったわけですよ。それで、『ティペラリー』の全部の楽譜と歌詞が欲しい……これは国会図書館へ行かなきゃ分らないと思ひまして。

井深 国会図書館でも分らないんじゃないの？

川崎 それが分かったんです……。『英語青年』という雑誌の昔のがありましてね。そこに、大正時代に非常に有名になった曲、これがもとの歌ですということで、大学の先生が書いたものが出ていたんですよ。それで初めて私には、ふざけた内容の曲だと分かったわけですけどね。

話はまだ続きます（笑い）。昭和天皇が摂政の宮時代の、大正九年か十年にイギリスを訪問された時に、歓迎の軍楽隊が『ティペラリー』を演奏したので、今度は、それを何とか見つけたいんですけど、食べ物の献立は出てても、軍楽隊が演奏した曲というのは書いてないんですね、新聞は。

井深 そりゃ、書いてないでしょうね。何と何と何、全部までは。何曲かやったわけでしょう。宮内庁の記録にもないですかね。

川崎 こっちがやったのなら別でしょうけど、そこまでの記録はないですね。

それから派生しましていろいろ調べてみたら、昭和天皇がイギリスへいらっしゃった時には、ニュース映画を作って、逐一、どんどん動かれるのを追って、大正天皇にごらんいただいていた。それを最終的にはその年の十月、帝国劇場で公開しているんですよ、一時間半ぐらい。そうすると、その時の弁士は誰でどう説明したか……また、これがよく分らない。

それからもう一説によれば、『ティペラリー』がそんなに日本で流行したのは、アメリカの映画会社が、無声映画の戦争物にはこの曲をかけると、レコードあるいは楽譜を送ってきた。それが映画と結びついて広がったんじゃないかと。女学校でも英語の先生がそれを教えていたというんです。

井深 昔は、探偵物だとチャンチャンチャカチャカチャンチャン……の『天国と地獄』とかって曲が決まっていたよな。戦争物だと、じゃ『ティペラリー』だったのかしら。

川崎 もう芸者さんまで三味線で弾いていたと。また、昭和五年に大阪の漫才師が『ティペラリー』を歌っているんですよ。当時だと英語とは無縁の人たちが、英語で、『ティペラリー』を歌って三味線を弾いている。そのレコードを見つけてくれた人がいましてね（笑い）。

こんな話もあるんです。ドイツが船を木材運搬船のように偽装して、その木材の下には大砲を積んでいる。それで、イギリスの輸送船を片っ端から沈めるんです。それをやっつけるためにイギリス軍艦がやって来る。軍艦が来ると、その『ティペラリー』をドイツ側がかける。『ティペラリー』の曲をかけると、イギリスの上官はみんな調子よくなってばあっと去っていく……。

井深 麻薬みたい（笑い）。

川崎 それほど世界中に広がって、みんなが歌った曲だそうですよ。その調べはまだまだ終わっていないんですけどね。どうしてもやっぱり、アイルランドのティペラリーという町まで行ってこなきゃ、分からないんじゃないかと。

とことん調べる……遊び心

井深 なぜ、そんなに取りつかれるようになったんです。大もとはなんですか。

川崎 『大いなる幻影』から始まっているんですけども、何ゆえにということではなく、やっぱりこれ遊んでいるんですよ。それが分かったからと言って、何の得にもならない。

井深 それとほかには？

川崎 もう一つは、やっと分かってきたのがあります（笑い）。それは体操のことなんですが、昭和十四年、ノモンハンでソビエトと衝突して、日本軍が大敗を喫した戦争がありました。

その時に、陸軍の参謀が帰ってきて、負けたのは体が貧弱だからだと。向こうの兵隊が、突撃の前に手りゅう弾を投げると、六〇メートルも飛ぶのに、日本の兵隊は一五メートルしか投げられないためにやられた。だから、何としても、腕の力が強くなる体操を作ってほしいというんで国民体操というのができたわけなんですよ。

その国民体操にいい曲を、と東京音楽学校（現・芸大）へ頼みに行ったんだそうですね。そうしたら「体操に音楽をつけるなんてことはやらない」と言われた。「実は体力がないために、若い兵隊がみんなやられてしまう。それで、何とかやられないようにしたいために体操を作ったので、それに何とか曲をお願いします」と参謀は頼み込んで、曲を作ってもらった。

それを我々は中学校の時に、新しい体操だといって練習したわけなんです。それで手りゅう弾が投げられるようにという話も聞かされたんです。

その曲がどんな曲だったかなと、これまた探しまして、神保町の古本屋の上の古いレコード屋さんで見つけたんですよ。

井深 それ、作曲したのは誰？

川崎 橋本国彦さんの作曲で、レコードになっているんです。それまでピアノだったラジオ体

操が管弦楽になった。最後のほうには短調が出てきて、何かもの悲しいんです。

いや、それでね、国民体操の前からあるラジオ体操に話はつながります（笑い）。もともとのラジオ体操というのは第一、第二、第三とあったんです。三番目はドイツの行進曲なんです。それもずっと知らなくて、最近になって分かりました。

カラヤンの『ドイツ名行進曲集』というのを聞いていましたら、何だラジオ体操じゃないかと（笑い）。ドイツの軍隊の行進曲をそのまま持ってきて、体操に合わせてやっていたわけですね。

そこからまた話は広がる。それをスタートさせたのが、郵政省 昔の逓信省ですよ。逓信省の簡易保険局が、健康のためにと、ラジオ体操をスタートさせた。それで、NHKが始めたのが昭和二年。アメリカの生命保険会社が健康維持のために体操を作って放送をした。それをまねて始めたんだそうです。

で、アメリカのほうはとっくにもう消えちゃったのに、日本はずっとつながって、国民体操というところまで膨らませて、戦後まで来たわけですね。

井深 アメリカの生命保険の会社の健康体操って、死んだら困るからですか。保険金払わなくちゃいけないから。

川崎 そうです、死んだら困るから（笑い）。

今度は、そのアメリカの生命保険会社が作った曲と体操というのが知りたいと思うんですけど、これは難しいですね（笑い）。

まねをして作らせたというんだから、逓信省の記録にはアメリカの何をまねてとか、これに倣^{なら}ってというものがないだろうかと、それを私は調べようとしているんですが、やたら調べる事が多くて、国会図書館、土曜日、日曜日あけてもらわなきゃ進みませんね（笑い）。

夢 作りたい映画

井深 でも、全部音楽絡みのことだね。そんなに音が好きですか。

川崎 音楽絡みのことが多いというのは、録音という、今のPCLの仕事柄そうなっちゃったわけですよ。実はそれで、作りたい映画というのも、私はあるんですよ。

フランスのリラダンという人が書いた『未来のイブ』という小説で、エジソンのことを書いているんです。エジソンが、人間と全くそっくりの、感情まで持っている人造人間を作るわけですね。それをイギリスの金持ちが買って、持って帰る時に、大西洋で船が沈没してなくなってしまった。そのニュースを聞いて、夜空を仰ぐエジソンの背筋をぞっと冷たいものか走ったと、それが小説の最後なんですけど。

機械で人間を作ろう、感情まで付与しようと、一生懸命にやったけれども、最後に、やっぱりあれは間違っていたんじゃないかと、怖くなる……やっぱり心までは機械で作れないという話なんですよ。これはどうしてもやりたいなと。

それからもう一つは、アルダス・ハクスリー 進化論で有名な生物学者のハクスリー
の一族で、小説家なんですけど、『すばらしい新世界』という作品を書いて有名になった人
です。日本にも文庫本で出ていますが、これも、試験管で人間を育てるといふ未来小説なん
ですね。この人の本で、これは日本に翻訳がまだなんですけど、『アフター・メニー・ア・
サマー（幾とせの夏過ぎて）』という小説があるんです。

内容は、これまた不老不死の研究をして、それで不死のためには、鯉の内臓のエキスを
抽出して、ついに成功したという話なんですけどね。

井深 それにしても、変な話の、不思議な本をいっぱい読んでいますね。

川崎 そうでしょうか（笑い）。小説ですからいろいろ起伏がありますけど、最後にイギリスの
古城へ訪ねて行く。訪ねて行って、城の中の地下深く下りて行ったらおりがあって、その
中に、二百年生きている二匹の猿がいた。これが、問題の不死の薬を飲んだ二人。それは
今もガーター勲章をつけていたと（笑い）。

その『アフター・メニー・ア・サマー』という作品の冒頭には、イギリスの詩人、テニ
ソンの詩がちょっとあるんです。

それはギリシャ神話で 暁の女神はその名のとおりに、毎朝毎朝きれいになって輝くわ
けですが、その女神が地上の青年を好きになり、「この人が死なないようにしてください」
と絶対神に頼むんです。「そうしてやろう」とOKをもらって、一緒に暮らした。

ところが、その時、不死とともに老いないことも頼むのを忘れちゃった。そのためにと
んどん歳はとってしまう。しかし、死なない。青年はすっかり老人になって、暁の女神に
「もう、いい加減にして、人間に帰してくれ」としきりに頼むので、うるさいから一室に
閉じ込めておいたら、その元青年の老人は蝉になったというギリシャ神話なんです。

井深 ジージー鳴く蝉ね。

川崎 はい。それで小説が始まって、一番最後は……。

井深 ガーター勲章の猿。

川崎 ガーター勲章になっちゃう。今怪奇ばやりだからちょうどいいんじゃないかと思いま
すけど……。不老不死 そこからまだ話は飛びます（笑い）。

中国では秦の始皇帝が儒教の本を焼いちゃったわけですね。そのために、『礼記』とかそ
の辺の書物はなくなって、半分ぐらいしか残ってないと。しかし、日本にはそれ以前に持
って行った人がいて、それがそのまま残っている、という詩を欧陽修という人が作って
います。

これは確か、岩波文庫の、唐、宗の時代の詩集の中に入っていると思いますね。

その詩は、日本へ不老不死の薬を求めて徐福という人がやってくるわけです。徐福は、
途中で自分が亡くなっても跡を継いで探してくれということで、苦い者から子供まで引き
連れて、大変な人数で日本へ、その煎せんじくすり薬を探しに来るわけですね。その時、徐福はそれ
らの書物を日本へ持っていった。だから、日本には完全な形で残っている。ところが中国、
我々のほうは始皇帝が焼いたために半分しか残っていない。本当に残念だ、何とかして、

それが見たいというふうな詩なんですよ。

徐福というのは、不老不死の薬を求めて日本に来て、熊野 和歌山県の一番南、そこに徐福の墓というのがあるんだそうですね、今でも。

井深 それは大叙事詩だね。大叙事詩というか、支那と日本とを全部ひっくるめてね。

どうして、こんなおもしろいお話をこんなにする人が、いつも謹厳な顔ばかりしているんですか、本当におどろいちゃった（笑い）。初めて聞く話がいっぱい。子供の時からこういう、どこまでも調べたりすることが好きだったんですか。

川崎 小さい時から本を読むのは好きでした。

井深 それで、分からなかったらどんどん追求して……。

川崎 追求していくということは好きではありましたが、とことんまでは……。今みたいに図書館まで行ってという時間がない、忙しくてとても、子供の頃は（笑い）。

井深 で、子供の時、一番好きだったのは？例えば、趣味とか、学校の勉強のほかにも。学校の勉強が一番好きなんていうのはうそだと思いますから（笑い）。

川崎 やっぱ本を読むことでしょうね。

井深 ご両親も本を読むのが好きでしたか。

川崎 ああ、おやじはとても好きだったですね。何のためにおやじはそんなものを買っていたのか知りませんが、『国訳漢文大成』なんていうのがあるんですよ。今でも古本屋にありますけど、大正から昭和の初めの頃出たものですね。これ漢詩から、文章から全部が載っている。とにかくそれを引っくり返して見るのが、私は好きでした。

井深 小さい時から、分かって分かってなくても、親の好きなものには、子供も興味を持って好きになる。話はそこへきましたよね。

今日は良かった。ありがとうございました。

川崎 どうも失礼いたしました。

おわり